

水上勉全集

22

水上勉全集 第二十二卷

昭和五十二年十月一日印刷

昭和五十二年十月二十日発行

著者 水上 勉

発行者 高梨 茂

印刷者 白井倉之助

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(五六一)五九二一

振替東京二一三四

検印廃止

©一九七七

目次

霧と影

死の流域

あとがき

3

307

573

霧

と

影

序章 ある投書

春めいた陽気が急に初夏の陽ざしに変わり、ずいぶん春夏の間は短いものだな、と季節の足の早さを考えさせられる頃、調子はずれな肌寒い一日があったりするものです。その日、四月二十五日も朝から街は鼠色ねずみいろに曇り、たいへん寒い日でした。

石田社長はいつものとおり、本郷元町の自宅から堀留の事務所まで都バスで出勤なさいますと、いつもより明るい顔つきで、女事務員の末野美子に、グロンサンを買いに行かせました。末野は、三分間ほどで行ける都電通りの薬局からいつもの中瓶ちゅうびんを買ってきて、社長に渡しました。社長は自分で瓶のフタをあけて、

「水をくれんか」

湯沸かし場から末野が水を持参すると、

「殿山さんは？」

と私のことを訊ねながら薬を服用したそうです。

「下職のほうへじかに廻って、十時にはこちらへ来られると電話がございました」

と末野は私の電話の伝言を申しました。社長は黙って新聞を読みはじめました。九時三十分だっ

たそうです。

末野は階下の郵便受を見に行き、三通の書信がきていたので、それを社長に渡しました。ハガキが一通、封書が一通、それに週刊業界紙が一通です。ハガキはK紡績の夏物服地発表会の案内状だったそうです。封書は誰からきたものか判らなかった、と末野は言っています。

九時三十分。その頃、私は亀戸の下職の家を出て、そこで出来上がっていた背広を三着だけ風呂敷に包み、亀戸駅のほうへ来る途中のお得意様「マツモト洋服店」に立ち寄っていた時、ふと時計を見て九時三十五分なのに驚き、五分程で用をすませて、急いで駅に来て、折よくホームへ来たお茶の水行きに乗りました。

堀留へ着いたのは十時二十分でした。エレベーターが故障しているので、階下のビルの管理室へ行って、いつ修繕が終わるかたずねてから、せまい階段を上りました。荷物を持っているので閉口でした。このエレベーターはちょいちょい故障して、こんなことはたびたびあります。あえぎながら三階の途中まで参りますと、上から降りてくる社長を見たのです。おや、と私は思いました。社長は窓を背にし、立ちはだかるように私を睨みすえていました。瞬間、私は何か悪いことをしたような気持になり、はて、社長にこんな顔をさせる理由は何だろう、と考えましたが、すぐそれは私の思いすぎだったことに気づきました。社長は別に怒っていませんでした。逆光線で暗い廊下に向かっていたため、恰幅のいい体が仁王様みたいに大きく見えたにすぎないのです。

「お出かけですか」

「女房にね、ちょっと買物をたのまれてね、すぐ帰ってくるから」

社長は腕時計を見ました。そして鼠色の合オーバーの前合わせのボタンを片手でいじりながら、私と階段ですれ違っておりて行きました。エレベーターの網囲いの向こうを社長は急ぎ足に廻りこみ、一階へおりる階段へ消えました。

私が見かけたこの姿が最後になったわけです。社長はそのまま帰ってきませんでした。

階下の管理室の少年が、自転車の修繕に行っていて、小伝馬町の自転車屋からペダルを踏んで交差点を横切ってくると、社長が停留所の安全地帯（室町、銀座方面行き乗り場）にいるのを見かけたそうです。少年は会釈えしやくしたけれど、向こうは気づかなかったと申しております。

「すぐ帰るから」と言った社長の帰りがおそいので、女事務員を帰したあと、私はビルの閉まる時間まで社に残っていました。午後十時前にベルが鳴り、孝子夫人からの電話でした。私はじかに社長が元町へお帰りになったものと思っていたので、夫人に言われてびっくりしたわけです。

「何か買物に行くと言って、出かけられたままですよ。奥さんから頼まれた物を……何だったのですか」

「ああ、いつでもよかったのに。幸男のベルトだったのですよ」

「ベルト？」

私は妙なものを社長は買いに行ったな、と瞬間思いました。夫人の狼狽ろうばいはそれから大変でございました。私は心配だったので、元町のお宅まで伺ったのです。夫人の目にも、べつにその朝の社長の挙動に変わった点は見られなかったそうです。ただ、社長が朝、洋服を着替える時に、ベルトの止め金が折れたそうです。

「幸男でも貸してくれんか。新しいのを買ってきてやるから」

そう言って社長は、坊ちゃんのベルトを締めて出かけられたそうです。変わったことと言えばそんなありふれたことぐらいで、他に行方不明になるような原因は、孝子夫人と幸男さんの三人暮らしのご家庭にあり得ようはずはございません。

また、私と末野美子の勤めております堀留の事務所は、会社が倒産以来、ようやく立ち直りかけた、私どもの希望に燃えた再建の根拠地でありました。将来に対する夢こそあれ、その事務所が因^{もと}になって社長を失^{しっそう}踪させねばならないような理由は、何一つ考えられません。末野は旧社以来の忠実な事務員でし、私とても、二十年も石田社長と苦勞を共にしてきた仲間です。失踪の原因は、私どもやご家庭からでないことは誰もが認めるところでございます。それでは、社長はいつたいどこへ行ったのでしょうか。

あの朝、なにげない顔で出社され、九時二十分から十時二十分までの間に新聞を読んで、書信に目を通し、グロンサンを女の子に買いに行かせた、ただそれだけの社長の模様を思い出すだけでは、とても失踪するような気配は考えも及ばないことでした。人間が事故にあったり、一大事に奇遇したりする場合、あとになって、あああれは虫が知らせたんだな、と何かを想起したりするものでございます。また、それはそれで納^{ちか}得がいたりするものでございますけれど、社長の失踪の朝には、まったくそのようなけぶりも見えませんでした。

私は夫人と相談の上、故郷の十日町や、社長が奉公時代に転々とされた千葉県の野田市、群馬県の高崎市などの縫製業者をたずね歩きました。他にも、社長が縁故としていたあらゆる所をた

ずねました。が、そのいずれにも、社長が立ち寄ったり、音信を通じたりしている箇所はありません。思いあぐねて、二十九日に孝子夫人と相談して搜索願を所轄署に提出いたしました。

刑事さんが、早速、捜査を開始してくださいました。いろいろ疑惑の場所が搜索されましたが、手がかりは掴めません。最後に残ったのは、当日の朝、社長宛に参りました封書の主の問題です。それは、末野美子の記憶によると、白い封筒にインキ書きで、石田寅造様と、社長の名が楷書で書かれてあったそうです。社長はこの封書を読んでポケットに入れて持って出たらしく、机の出しや書類函を捜しても見つかりませんでした。失踪先はこの封書と関係があるのではないかとの推定から、郵便局その他あらゆる手がかりを捜査してくださいましたが、結局、その封書は謎を深めただけで判明いたしませんでした。その後の捜査の行き悩み状態は、あるいは捜査課長様もご存じではないかと思えます。考えてみますと、東京には一日に百人もの家出人の届出があるそうです。大勢の行方不明の連続で刑事さんも多忙をきわめ、私どもの社長を特別に力を入れて捜していただけということは虫のよい望みかもしれません。が、しかし、私が今日ここに勇氣を出して拙文をしたためましたのは、私だけが心の底で考えて参りました疑惑を参考までに聞いていただきたいと思つたからであります。

捜査課長さま

それは二月三日のことでした。その男、野見山渉がはじめて私どものカミング洋行に現われたのです。野見山渉は宇田という男の紹介状をもっておりました。宇田は二年程前、今は倒産に

なつて明け渡してしまいましたが、私どもの全盛であつた頃のカミングピ
ル建築の際に、鳶職頭とびしよくかしらとして出入りしていた男で、別に深い知合いでもなかつたのですが、そ
の男が改まってわざわざ名刺に紹介文を書いてきたのですから、ちょっと気にかかることはあ
りました。とにかくどんな話かまあ会ってみようと、社長はその野見山渉とはじめて会つたの
です。野見山渉は現代商事の社長で、その会社は京橋にあると申しました。現代商事は北海道の
炭鉱労組に電気器具などを取引している会社で、なんでも労組の理事をしていた者が会社の幹部
にいて、そのコネをよりどころにして大きく商売をし、今では相当の資本をもつ商事会社になつ
た、と野見山は会社の内容を説明してから、もしカミング洋行に背広やオーバーのストックがあ
つたら売ってくれないか、と頼みにきたのでした。土木建築業の宇田が紹介してきた男にしては
妙な男だとは思いました。が実はこの時、私どもは八千枚の背広とオーバーを抱えて既に倒産寸
前にあつたのでございます。ご存じのように、この冬は、繊維業界の不況は底をついていて、と
くに私ども二次製品卸業者は、暖冬異変で頼みにしていた冬物がさっぱり頭打ちになり、どこの
仲間業者にも六、七千枚の背広のストックはザラにあるといった有様。大資本ならともかく、私
どもの小資本の会社で八千枚の背広をストックするなど、あきらかに危機であつたわけござい
ます。三月には秋物決済の手形期日も迫っていましたし、この危機を乗り切るには、銀行に泣き
つくか、ストックを見切るか、いずれかの方法しかありません。そういう矢先、ひょっこり現わ
れたのが野見山でした。この男は三十二、三歳、五尺六寸ほどの長身で、いつもダブルの洋服を
着ている、まあ青年紳士と言つたら一番似合う男でした。特徴のあるカン高い声と、冷たく見え

る青白い細面の顔が、病的な鋭い感じをあたえる男です。が、弁舌は巧みで、まことに外交手腕というか人を説得するには独得の熱弁と魅力をもっている男でした。私と社長には、この日、野見山が話した北海道の労組との取引が、野見山の言うように契約されるなら、思いきって見切り売りしてもいいと思われる条件だったのです。労組はN炭鉱が五千名、S鉄鋼が六千名、家族も含めると相当の組合員になります。またこの労組には購買部があって、従業員には月賦で給料天引きで売るけれど、仕入れは組合貯金の中から一括支払いしてくれるということでした。しかも労組は手数料として三分しか取りたてません。これは、たとえ「三十日手形」にしても、一着六千円見当に売れるものなら、願ってもない商売と言わねばなりません。有名労組の手形なら労働金庫で換金してくれることも考えられましたから安心でもございます。だが、私と社長は即答は控えました。初対面の野見山を警戒したのです。すると野見山は、「もしよろしかったら近日中に北海道から購買部長が見えるから、その時立ち会っていただいて納得いく交渉をしてほしい」と申します。これは順序立った言葉と申ししたので、社長はこの時、その部長が上京されたら一度夕食でも一緒にしようと、野見山に約束したのでございます。それから三日ほどして野見山は、津野島枝という二十六、七歳と見うけられる女をつれて参りました。「会計係です」と言っただけの女を紹介しました。均整のとれた長身の美しい女で、ブルーのニットینگ・スーツがよく似合い、落ちついた物腰と柔らかい言葉づかいは本当に珍しいほど上品な感じで、目鼻立ちのすっきりしたモデルのような美貌の主でした。野見山は女の紹介を終ると、「実は北海道から購買部長が明後日上野へお着きになる。こちらの都合はどうか」と聞くのです。社長は日にちと

時間を約束しました。とにかく会ってみるだけでも、と考えたのです。会場は現代商事のほうで準備をするというので、その連絡を待っていますと、すぐその日のうちに電話で、会合の場所は、この機会に一度ぜひ現代商事という会社を見てもらっておく必要もあるから、会社の応接室にしてくれということです。これはもったもなことでと私どもも信用しました。当日午後六時頃でした。現代商事から電話がかかり、社長は出かけました。その時、社長は私にも行かぬかと誘いましたが、私は仕事があったのと、それに、この場合の交渉は社長一人のほうがいいと思ったのです。私はどちらかというと細心すぎて気の弱いところがあります。反対に、社長はいくらか粗略だけれど押しの強い大胆なところがあります。こういう商売の場合は社長のほうが適していると思いますのです。話次第では八千枚のストックが売れるのですから、重大な任務と言えたかもしれせん。そうです、この日の交渉にはまったく社運がかけていたのでございました。北海道の部長は二階堂洋造という四十歳前後の男で、恰幅のいい、見るからに炭坑人らしい赭ら顔の男だったということです。窓から川の見える応接室で社長はこの男と会い、野見山と三人で協議を重ねました。この時、野見山の出した条件は、八千枚の背広とオーバーを六千万円でコミにして売らぬか、そうすれば一括して二通の手形を切る。つまり一通は五百万円（三十日払）、一通は五千五百万円（四十日払）とするが、これは現代商事の振出しではあるけれど、N炭鉱労組の保証手形とすること、製品は手形と引き換えに受渡しする、とまあこういうことです。振出しが現代商事であっても、組合の保証があればいいわけで、社長は腹の中で、うまくいったなと思ったのです。一枚六千円以上で売れるのだから、市場の投げ売りに比べれば、いいと言わねばなり

ません。社長は即座に承諾しました。もっとも、この時、社長は、二階堂という部長が非常に熱心で細心な男で、その契約のしかたに律義りちぎな一面を見せたのが気に入ったからだ、と申しました。その翌日、私は社で社長の自宅からの電話をうけ、この夜の結果を聞きました。夕刻五時頃でした。津野鳥枝が一人で私に面会を申し込み、お約束の手形を持ってきたと言いました。私は二階へ通し、手形を改めてから金庫に入れ、「荷物はいつ取りに見えますか」とたずねますと、津野鳥枝は、「販売部の車があき次第に参ると思います」と言って、すぐに帰って行きました。二十分程してトラックが二台やってきました。やがて私どもの番頭と一緒に、トラックに乗ってきた上乗りが二名ずつに分れて、八千枚の背広とオーバーを積みこんだのです。終ったのは六時過ぎでした。番頭が「どこへ運ばれますか」とたずねますと、運転手が「箱崎町です」と答えたそうです。間もなくトラックは岩本町を左に曲り、夕暮れの街に消えてしまいました。

二月三日から十日までに、このような私どもの運命を左右する出来事があったわけです。私と社長が詐欺さぎにかかったと知ったのは、それから二十日ほど後のことでした。

それは、現代商事をたずねてはじめてわかったのです。それまでに社長は現代商事をたずねております。社長は現代商事の二階の応接室で野見山と二階堂とに会見したのです。にもかかわらず、私と社長の二人がその京橋ビルの三階にある現代商事をたずねました時は、野見山は不在でした。不在のはずです。野見山はもちろん、津野鳥枝も、その現代商事と何の関係もなかったのです。現代商事は、北海道にも電気器具にも関係のない用紙販売業者だったのでございます。まるで白日夢のようなことなので、よく聞いてみますと、この紙屋さんは野見山という男の顔な

ど知らないばかりか、次のような野見山のトリックにひっかかったことがわかりました。野見山は三階にある現代商事の看板がビルの外側から見えるのを利用して、まずビル内に社長を入れ、二階にあった空室を利用して、これを現代商事の臨時応接室に仕立てたのです。この空室は、ビルでは借り手がくるまで、隣室にある甲陽産業という鑑詰会社が椅子とテーブルを置かせてもらっていたものだったそうです。その椅子セットをうまく利用した野見山は、この空室があることをどこでキャッチしたもののか判明しません。野見山が二階堂と石田社長を招じ入れて会談をしたのは三十分ほどでしたが、この時間には廊下を隣室の甲陽産業の者が通って知っていたそうです。しかしドアが閉まっていたから、その人は、新しい借り手が来て管理人が相談でもしているのかと思って気にとめなかったと申します。まったく野見山の仕組んだこの芝居については、あとで捜査に当られた刑事さんも舌を巻かれ、こんな巧妙な計画詐欺は珍しいケースだと感心されたほどでございました。ところで、詐欺にかかったとわかった時の社長と私の狼狽はどのようなものでございました。とにかく捜査二課の岩田警部さまをはじめとして、刈崎刑事さま、曾田刑事さま、鎌井刑事さま、十数人にわたる皆さまの真剣な捜査の甲斐もなく、この京橋ビルからは何の手がかりも掴めなかったのでございます。八千枚の背広の行方、野見山を紹介した薦職の宇田、野見山の乗っていた高級車、北海道から来たという二階堂洋造、津野鳥枝、使用された名刺、指紋、偽造手形の印判製造業者、等々、あらゆる手がかりをたよりに虱つぶしの捜査が開始されましたが、北海道には二階堂という人物はいましたけれども人違いだったり、津野に似た女もいたけれどやはり人違いだったり、まったく事件は迷宮に入ってしまった。これは、私